福山大学

2020

# 新入生にすすめる50冊の本

［表紙写真タイトル：三蔵屏風］

「放課後の校舎を探検していたところ、窓いっぱいに広がる桜並木を見つけました。教壇に立つと、薄暗い教室の奥で静かに舞う花びらの様子がとても綺麗でした。」
（福山大学「桜のフォトコンテスト」2019 年度さくら賞受賞作品）

写真提供：　武正麻佑（経済学部経済学科 4 年）

# みなさんへの「読書推進」に

大学での学びの中核は、本を読み、その内容について独自の評価を下し、それを踏まえて自らの考えを産み出すことにあり、4 年間で読書力を身につけることが大事です。

『新入生にすすめる 50 冊の本』の刊行は、新入生に向けて、学生・教職員が薦めたい本を選んで紹介するというものです。そのコンセプトに基づいて 2018 年度から試行が始まった本学独自の読書推進システム「注文の多い図書館」は、2019 年度、全学的に始動しました。本システムは web 上で行う読書の独習システムで、学生が各自選んだ本について書評を書き、web から提出します。従来行ってきた書評の投稿とともに、上記の「注文の多い図書館」からの書評とが両方揃うこととなりました。提出された書評の中で、新入生向けの書評として評価の高かった 50 篇程度を『新入生にすすめる 50 冊の本』として、次年度の新入生に配布します。

2019 年度は全学部学科から併せて 150 名の投稿があり、本を読んで良かったという一人一人の声が聞こえるようで、思わず読んで見たいと心を動かされた投稿作品が数多くありました。

そして、本システムのもう一つの特徴は、各学科の教員の専門に関わる推薦図書を含んだ、いくつかの選書リストを提示していることです。本書に掲載されている書評には、各学部学科の専門からのおすすめ本もあり、読み応えがあります。

皆さんが大学生活での読書において一生の宝物を獲得することを祈ります。

福山大学附属図書館
館長　青木 美保

# 人生の道しるべ


日常　石倉美和
『フランス人は 10 着しか服を持たない』
ジェニファー・L・スコット著　・・・・・・・1

かばくんとぼちぼち歩もう　大石　楓
『ぼちぼちいこか』
マイク・セーラー作，ロバート・グロスマン絵　・・・・・・・2

自分を持つ　岡野竜弥
『コンビニ人間』村田沙耶香著　・・・・・・・3

大切なもの　柏木駿希
『流星ワゴン』重松清著　・・・・・・・4

“生きる”という意味　近藤隼人
『神様のメモ帳』杉井光著　・・・・・・・5

ほんまに広島はすごいんじゃけぇ！　佐藤理恵
『広島はすごい』安西巧著　・・・・・・・6

神様のカルテを読んで　佐藤瑠子
『神様のカルテ』夏川草介著　・・・・・・・7

自分の人生を生きる　柴田美優
『奇跡への扉』木村優貴 著　・・・・・・・8

悩む力は人間の力　曽我部弘希
『悩む力』姜尚中 著　・・・・・・・9

落ちこぼれからの成功　中田昌汰
『オール1の落ちこぼれ、教師になる』宮本延春 著　・・・・・・10

私たちみんなが持っているもの　橋口あゆみ
『チーズはどこへ消えた？』スペンサー・ジョンソン 著　・・・・・・11

“自分を見つめなおす”　松本梨七
『何者』朝井リョウ 著　・・・・・・12

## 学びの道しるべ

経済学とは　大賀辰太郎
『大学 4 年間の経済学が 10 時間でざっと学べる』
井堀利宏 著　・・・・・・13

今するべき事に全力を尽くせ　河村早紀
『スラムダンク勝利学』辻秀一 著　・・・・・・14

判断と決断の重要性　鈴木祐健
『判断と決断』中竹竜二著　……15

時代を作った少女マンガ　髙田莉穂
『私の少女マンガ講義』萩尾望都著　……16

真摯さとは何か　田坂共平
『もし高校野球の女子マネージャーが
ドラッカーの「マネジメント」を読んだら』岩崎夏海著　……17

成功の裏で奮闘した海の手配師　仲谷瑞起
『「水族館」革命』石垣幸二著　……18

経済初心者にもわかりやすい！　鍋谷寿孝
『入門日本経済論』釣雅雄著　……19

物事を俯瞰してみよう　新田耕大
『「こうあるべき」をやめなさい』和田秀樹著　……20

楽しくおカネを学ぶ　能登俊作
『おカネの教室』高井浩章著　……21

マンUビジネス　畠中健人
『ビジネスで大事なことはマンチェスター・ユナイテッドが教えてくれる』
広瀬一郎，山本真司著　……22

**経済と社会問題との関係** 宮座雅治
『99%のための経済学』佐野誠著 ……23

## 科学の道しるべ

**真のトースターの価値** 魚崎拓己
『ゼロからトースターを作ってみた結果』トーマス・トウェイツ著 ……24

**見えてくるものはそれだけ？** 喜多村侑佳
『すぐわかるキリスト教絵画の見かた』千足伸行[ほか]著 ……25

**日本の古民家は古いだけじゃない** 桑田成年
『生きられた家』多木浩二著 ……26

**野菜のことを知りたいのならこれ** 瀬尾飛翔
『データが語るおいしい野菜の健康力』
及川紀久雄，丹羽真清，霜多増雄著 ……27

**虫の分類学の進化** 平野琉希
『虫の文化史』笹川満広著 ……28

## 文学の道しるべ


本の自由　青沼優佳
『図書館戦争』有川浩著　……29

アニメも原作も両方面白い！きっとあなたも
「人間と狸と天狗の三つ巴」に夢中になる　赤枝沙紀
『有頂天家族』森見登美彦著　……30

本を楽しむ方法の１つ　板岡真央
『八日目の蝉』角田光代著　……31

現代に生きる若者に感じて欲しい命の重さ　江草海暁
『永遠の 0』百田尚樹 著　……32

恋とか愛とか人生とかを考えさせられる群像小説　桒田優月
『ふがいない僕は空を見た』窪美澄著　……33

生きることの尊さ、
生きている本当の意味を確認する参考書　河野隼也
『君の膵臓をたべたい』住野よる著　……34

隠された陰に潜むモノ　清水楽叶
『精霊の守り人』上橋菜穂子 著　……35

異世界への扉　達川哲志
『二分間の冒険』岡田淳著　……36

あなたの宝物もきっと拾ってもらえる。　谷口佳音
『深海カフェ海底二万哩』蒼月海里著　……37

緊張と臨場　松島令磨
『王とサーカス』米澤穂信著　……38

野球小説・児童書における革命本　安井雅浩
『バッテリー』あさのあつこ著　……39

## こころの道しるべ

海面に向かう馬のように自由に生きよう　宇山真依子
『カラフル』森絵都著　……40

愛しぬくということ　小川哲平
『大恋愛』大石静著　……41

親友と愛の重さの違い　鈴木秀治
『こころ』夏目漱石著　……42

あなたにカフカ、処方します。　戸田一樹
『絶望名人カフカの人生論』フランツ・カフカ著　……43

ぽかぽかごはん　中村直人
『東京すみっこごはん』成田名璃子 著　……44

知ってほしい。動物との約束。　西添亜美香
『犬と私の 10 の約束』サイトウアカリ著　……45

波乱万丈なアスリート人生を駆け抜けた
伊良部秀輝投手の素顔と残した功績がわかる本　早川達二
『伊良部秀輝』団野村 著　……46

やる気を出すためにやる気を出して読む本　松岡邦丸
『やる気はどこから来るのか』
奈須正裕著　……47

自分自身に語りかけ、明日に向かって生きる　宮﨑開都
『置かれた場所で咲きなさい』渡辺和子 著　……48

目の前にあるものは事実ですか。　森田美有
『Le Petit Prince 星の王子さま』サン=テグジュペリ作　……49

幸せ　山本真史
『そして、バトンは渡された』瀬尾まいこ著　……50

（備考：所属は令和２年３月現在です。）

## 日常

### 『フランス人は 10 着しか服を持たない』

**ジェニファー・L・スコット 著，神崎朗子 訳（大和書房）**

あなたは今の暮らしに満足しているだろうか。あなたの暮らしがもっとより良く素敵なものに変わったとしたらどうだろう。気持ちも前向きになり仕事や勉強、プライベートもなんでも上手くいきそうな気がして来ないだろうか。

主人公はカリフォルニアからパリに留学してきたばかり。ホームステイ先はフランスの貴族の血筋を引く由緒正しい家系。そこでの暮らしはカリフォルニアにいた頃では考えられないことばかりだった。みんな生き生きとしていて自分というものを持っている。どうしてこんなに毎日を楽しく、大切にできるのだろうか。それはホストファミリー達の暮らしの中に答えがあった。主人公はホストファミリーと過ごす中で様々なことを学んでいく。カリフォルニアでの自堕落な生活と今までの固定概念からパリでの生活を疑問に思ったり、驚いたりしたが最初から諦めるのではなくチャレンジしてみる、そうすることで様々な事に気付きより良い習慣を身につけることが出来た。

あなたもこの本を読めば何気なく過ごしてきた日常が特別なものに見えてくることだろう。暮らしの質を高めてくれる秘訣が沢山学べる、そんな本。

石倉 美和（人間文化学科 1 年）

## かばくんとぼちぼち歩もう

### 『ぼちぼちいこか』

**マイク・セーラー 作，ロバート・グロスマン 絵**

**今江祥智 訳（偕成社）**

「大学生にもなって絵本？」と思う人も多いと思いますが、私たちも小さい頃は絵本を読んで、物事を考えたり、感じたりしたはず。忙しなく動き続ける現代だからこそ、社会に出る前にもう一度、初心に戻ってみませんか。

ストーリーは、主人公の関西弁を話すかばくんが、バレリーナ、パイロットといった様々な職業に挑戦するも、どれも上手くいかず、失敗ばかりしてしまいますが、最後は前向きに、「ぼちぼちいこか」と言う流れになっています。

私たちも、入学当初は周りと馴染めるかどうかの不安や、勉強についての不安があると思います。そんなときに思い出して欲しいのが、「ぼちぼちいこか」という言葉です。かばくんはこの本の中で「自分のペースでやればいい」、と私たちに教えてくれます。

私にとって、かばくんはずっと私を前に引っ張ってくれる存在です。皆さんもかばくんと一緒に前向きに進んでみませんか？

**大石 楓（心理学科１年）**

## 自分を持つ

# 『コンビニ人間』

**村田沙耶香 著（文藝春秋）**

普通とは何か、という疑問に周りの人の行動を見て、自分を造り出し、ぶつかるような人と出会っても自分は自分だと貫くことができる主人公の物語。

主人公は幼少期に「普通ではない」行動をして問題を起こし、それ以来周りの「普通」を真似することにより自分を造りだし、周りにとって「普通」の人間として生きてきた。この本は、味覚、聴覚、視覚、嗅覚、触覚の五感の使い分けが鮮明なので、実際に物語の世界観にのめり込んでいるような感じになる。

人間は「ある種のアイデンティティが伝染し変わっていく」という性質が、興味をそそられるような表現で書かれている。また、主人公をはじめ、生活を過ごしていくうちに登場してくる妹や新人アルバイトなどの人物像も鮮明で、主人公からみる登場人物も面白い表現で書かれている。

「普通」について悩んでいたり、言葉にできないような複雑なことに悩んでいたりしたら、この『コンビニ人間』を読んで、自分なりのしっかりとした意見をもってほしいと思う。

岡野 竜弥（心理学科１年）

## 大切なもの

### 『流星ワゴン』
**重松 清 著（講談社文庫）**

あなたはやり直したい過去はありますか？もしあるなら、あなたはこの本を読むべきです。この本は、あなたのように、過去に後悔を残してきた事をやり直すために行動している人々の話だからです。

この本の主人公は会社員ですが、家庭は崩壊寸前です。主人公は人生がどうでもよくなり、生きることを放棄しようとします。しかし、赤いワゴン車に乗った不思議な親子に出会い、その出会いが主人公のこれからの人生を大きく変えていくことになります。そしてもう１人、主人公の人生に影響を与える人物が存在します…それは主人公の父親です。こうして、主人公は不思議な親子・主人公・主人公の父親の４人で、不思議な時間旅行の旅に出ます。そこで、主人公は今まで知らなかった真実や、本当に大切なことを知っていくのです。

最後に、主人公達が旅の先に何を手に入れたか、あなた自身の目で確かめてください。この本を読み切った後、あなたは誰のことを思い浮かべているのでしょうか。

柏木 駿希（海洋生物科学科１年）

## “生きる”という意味

### 『神様のメモ帳』
### 杉井 光 著（アスキー・メディアワークス）

主人公の鳴海は、あまり学校に馴染めていない高校生で、冬のある日、ひょんなことから同じクラスの生徒と二人で部活を始める事になります。最初こそ面倒に感じていたものの、様々なちょっと変わった人達(ニート)に振り回されながら、鳴海の生活は今までとは違う充実したものになっていきます。しかし、その時間が長く続くことはありませんでした。とある事件に巻き込まれ、鳴海は大切なものを失い、絶対に忘れることのできない出来事となります。その時鳴海のとった行動、導き出した答えとは…！

この作品は鳴海が様々な人と関わることでその人たちの生き方を知り、何のために自分は生きているのかを考えていく物語でもあります。正しい生き方とは何か、普通に生きるとはどういうことか、ちょっと哲学的ではありますが、とても奥深い作品になっていてオススメです。

では最後に…あなたはなんのために生きていますか？

近藤 隼人（情報工学科１年）

## ほんまに広島はすごいんじゃけぇ！

### 『広島はすごい』
**安西 巧 著（新潮新書）**

縁あって福山大学の門を潜ったみなさん、ようこそ福山大学へ、そして広島へ！

横浜から赴任してきた日本経済新聞社広島支局長が、新聞記者の独自の視点で広島のヒト、モノ、マチ、カイシャを取材し「広島的なもの」を熱く語る一冊です。

まずはセ･リーグ優勝三連覇をも果たした市民球団、我らが広島カープから、マツダ、カルビー、アンデルセン、モルテン、カイハラ、ダイソー、セーラー、綾瀬はるか、有吉弘行、吉田拓郎、奥田民生、吉川晃司、世良公則、ポルノグラフィティ、Perfume…など。

筆者は、広島の瀬戸内海に面した温暖な気候に恵まれた風土、幾多の困難を乗り越えてきた歴史を背景に、県民気質とモノづくり戦略を探ります。そして「群れない、媚びない、靡かない」気質に着目し、個性豊かでユニークな存在感のある姿に今こそ学べ！と。ここに生きるヒントがありそうです。広島人の私も再発見。

まあ、ちょっと読んでみてぇ。

**佐藤 理恵（工学部・生命工学部事務室）**

## 神様のカルテを読んで

### 『神様のカルテ』
**夏川草介 著（小学館）**

この物語の主人公は、24 時間、365 日対応の病院に勤める 29 歳の医者である。悲しむことが苦手な主人公を、老人のがん患者である安曇さんと、妻のハルなどが、徐々に変えていく。

悲しむことが苦手であるため、治るかどうかわからない病気にかかってしまった患者の寿命を無理やり延ばすべきか、患者が幸せを感じるための治療をするべきか分からなかった主人公は、安曇さんに出会って、患者の希望に沿い、患者が幸せを感じ、苦しまない最期を迎えることが大切だと知ることが出来た。この物語を読むと、誰でも温かく、和やかな気持ちになることは間違いない。

私が実際に経験しないであろう日々が書いてあるこの本を読んで、こんな日々はあまり送りたくないと思うことはあったが、安曇さんのような人に出会い、様々なことを学び、その患者に感謝される、そのような日々もとても良い日常だと感じた。私が知らないところで世界には幸せが溢れているのだと思った。

ぜひたくさんの人に読んでもらいたい本の一つである。

佐藤 瑠子（経済学科 1 年）

## 自分の人生を生きる

### 『奇跡への扉』
**木村優貴 著（文芸社）**

これから先長い人生をどのように生きるのか考えたいときに、この本をぜひ読んで欲しいと思う。

この本の主人公は、夫がアルコール依存症になり、その介護が大変であるにも関わらず、主人公のせいでアルコールに走るのだと非難される。そんな中、夫とは30代で死別、母と子で生きることになる。その後、恋も実ることはなかったのだ。そんなことが書いてある本だ。

しかし理解者もいた。義母は、夫の介護も育児も協力的で、主人公を支える大切な役割をもっていた。義妹は、夫と死別後に新しい恋について主人公が打ち明けた時、気持ちを理解できると伝えている。逆に実母は、夫と死別後支えとなった男性を主人公が紹介した時に、「関係ない人間だ」と怒鳴る場面がある。

人生には様々なことが起きる。これからもそうだ。諦めることなく、自分の思いを持って一生懸命生きれば、必ず理解してくれる人がいて、人生がひらけてくると考える。

この本の主人公から、私は、いろんなことが起こっても、信念を持って生きていれば、未来がひらかれるので、自分の人生を生きることが大切だと学んだのだ。そんなことを学べる本なので、大学に入られた今のきっかけで、ぜひ読んでもらいたいと思う。

柴田 美優（海洋生物科学科１年）

## 悩む力は人間の力

### 『悩む力』
**姜 尚中 著（集英社新書）**

私は、悩むことがよくあり、今までは「悩むより、こうしよう」と勧める本ばかりだったが、初めて悩むこと自体についての本を見つけたので手に取った。

著者は、東大の情報学の教授で、順風満帆に見えるが、学生時代にはかなり悩んでいた。「自分とは何か」「何のために生きているのか」という答えのない悩みを宿していた。しかし、そのような悩みこそ現代の生き方を見出す可能性があるとこの本は述べている。夏目漱石やシェーバーの生き方をヒントに“悩む”ことについて考えていく。

私は、この本を読み、久しぶりに新しい方向性のあるものを見つけることが出来た。現在、多くのタメになる本が世界中で売られているが、現代の抱えている多くの人が悩み苦しんでいる問題について書かれているものは中々ない。現実逃避するわけでもなければ、何かに縋るわけでもない。人間だけの「悩む力」を生かし、生きていくという生き方を述べている。なんとも人間らしい生き方だと考えた。

科学的根拠は無いが、確信をついているこの本をぜひ読んで、生き方の参考にして欲しい。

**曽我部 弘希（経済学科１年）**

## 落ちこぼれからの成功

### 『オール１の落ちこぼれ、教師になる』
**宮本延春 著（角川文庫）**

この本の作者である宮本延春さんは、小学生時代に酷いいじめを受けていました。その壮絶ないじめは、幼い宮本さんを精神的にも肉体的にも傷つけました。宮本さんは自殺を考えたこともあったそうです。中学一年生の成績も「オール 1」。いじめも続きました。

そんな長いいじめの中で「いじめられない」ために習いはじめた少林寺拳法で、初めて自分に自信を持てるようになりました。中卒で大工の見習いとして就職し、十六歳の時に母、十八歳の時に父を亡くしました。

そして二十三歳の時、偶然アインシュタインのテレビ番組を見て物理学に興味を持ち勉強をはじめました。二十四歳で定時制高校に入学。二十七歳で名古屋大学に合格、大学院までの九年間、物理の研究に没頭しました。

このように、中学生の時に「オール 1」だった宮本さんが「子どもの痛みが最もわかる教師になりたい」と教壇に立つまでのたくさんの苦しみや努力などが書いてある本です。

**中田 昌汰（経済学科１年）**

## 私たちみんなが持っているもの

### 『チーズはどこへ消えた？』
**スペンサー・ジョンソン 著，門田美鈴 訳（扶桑社）**

この物語に登場するのは、ネズミのスニッフとスカリー、小人のヘムとホー。二匹と二人は、「迷路」のなかに住み「チーズ」を探して生きています。

「チーズ」とは、私たちが人生で求めるもの、つまり、仕事、家族、財産、健康、そして精神的な安定等の象徴。「迷路」とは、チーズを追い求める場所、つまり、会社、地域社会、家庭･･･等の象徴です。

その「迷路」の中で、「チーズ」が消えてしまいます。そんな時、二匹と二人が「チーズ」を探す中で、何か予想していなかったことが起こったとしても、事態を分析しようとして、物事を複雑化し、先の不安に悩まされる必要はないということを学びます。

この物語はとても単純なものです。二匹のネズミと二人の小人がチーズを求めて右往左往するだけ。ですが、四者が四様の性格を持ち、四者四様の行動をします。それは私たちみんなが持っている「単純さ」と「複雑さ」を象徴するものなのです。この一見シンプルな物語には、状況の急激な変化にいかに対応すべきかを説く、深い内容がこめられているのです。

**橋口　あゆみ（人間文化学科１年）**

“自分を見つめなおす”

## 『何者』

**朝井リョウ 著（新潮社）**

皆さんは、自分自身の性格で嫌いなところはありますか？また、それを素直に認めることができますか？今回ご紹介する本は、そんな自分を考えさせられる本です。

就活 2 年目の主人公・拓人。拓人は人を観察・分析することを得意とするが、それが裏目に出て、自分の短所から目をそらして自分を肯定化しようとしているだけなのである。昔、劇団を組んでいたギンジと一緒に頑張っていくが、いろいろあったことにより仲まで悪くなってしまう。しかしギンジの Twitter で今何をしているのか等を知り、自分ができていないことをして無茶をしているギンジを「カッコ悪いな」と思うのである。しかし就活仲間やバイトの先輩により、それは自分を肯定化しようとしているだけであることに気付き、それにより内定が出ないのだと気付く。

自分自身の嫌いなところ、人の言うことは素直に聞くことが大切であるということに気づかされる物語です。自分が悩んだ時、就活生になったときに読んでいただきたい本です。

**松本 梨七（薬学科 1 年）**

## 経済学とは

### 『大学４年間の経済学が 10 時間でざっと学べる』
**井堀利宏 著（KADOKAWA）**

経済学は人を幸せにするためにある。

それを研究する手段としてミクロ経済学、マクロ経済学がある。

経済学はカネを研究する学問であり、ただ金儲けする手段を研究する学問と勘違いする人がいる。しかし人は金がないと得ることが出来ない幸せもあるのだ。

それを学ぶことができるこの本は、図やグラフ、身近な例（リンゴ等）を使い、経済学について全く知らない人やこれから経済学を学ぶ人、高校生でも読みやすい工夫がされている。事実、私自身も本を読むことが苦手だったが、この本はわかりやすく、読みやすい工夫がされていた。だから私でもコツコツ読むことが出来たし、少しずつ理解することもできた。

これから経済学を学ぶ新入生の皆さんは、この本を読んで土台を作った上で講義を受けるともっとわかりやすいと思う。短い時間で読むことも出来るので読んでおいて損は無い。

大賀　辰太郎（税務会計学科１年）

## 今するべき事に全力を尽くせ

### 『スラムダンク勝利学』
**辻 秀一 著（集英社インターナショナル）**

皆さんは、「勝つ」と言えばどのようなことを思い浮かべますか。スポーツで相手に勝つ、自分に勝つなどさまざまだと思います。そのために大切なのは、そのときどきに「するべき事」をできる限り一生懸命やることです。この本は、勝利するための考え方や学ぶべき考え方が紹介されています。

目標や結果をただ追うのではなく、今、するべき事をするという一瞬一瞬の積み重ねが重要です。

そのために、日常生活における考え方や行動の仕方が大切であると、著者は言っています。結果に一喜一憂するのではなく、そこから何を学び、どのように変化したのか?に気付くことが、勝つための鍵になってきます。

また休養をうまく取ることで心に余裕が生まれ、本番の時、より良いコンディションで最高の実力が発揮出来ると思います。

スポーツをする人のみならず、いかなるときにも実力を発揮し、そして自分にふさわしい結果を手に入れたい人へオススメの一冊です。

河村 早紀（薬学科１年）

## 判断と決断の重要性

### 『判断と決断
### —不完全な僕らがリーダーであるために』
**中竹竜二 著（東洋経済新報社）**

この本では、ある大学のラグビー選手の話が元になっています。この選手が所属するラグビー部がこれまで負けてこなかった相手に大敗したことで、キャプテンとしての判断や決断の重要性を説くことがメインになっています。

著者は「判断」とは過去について判断すること、「決断」とは未来への方向性を打ち出すことという考え方をもっており、両者はまったく違うものだと区別しています。ラグビー部のキャプテンとして監督やチームメイトから指示や命令を受ける場面は多くあるので、そこでの判断の仕方やこれからの決断を下す力を試されてしまいます。そんなときにどうしたら一番チームが前に進むことができるのか、すぐに立て直し、目標に向かって努力できるかを、自らの経験を踏まえて細かく書かれています。今チームのキャプテンとして活動している方にとっては、共感できることがあると思います。

ぜひ、この先の判断と決断が迫られるときのために、この本を手にとって見てください。あなたの考え方が変わるかも知れません。

鈴木 祐健（海洋生物科学科１年）

## 時代を作った少女マンガ

### 『私の少女マンガ講義』
**萩尾望都 著（新潮社）**

書店に行ったときに並べられている少女マンガ。あなたは手に取った少女マンガのルーツを知りたいと思ったことはありますか？

少女マンガを発展させてきたのは誰なのか、世界に通用する独自の文化としてどのような影響をもたらしたのでしょうか。

手塚治虫の『リボンの騎士』から、よしながふみの『大奥』まで、少女漫画家の物語の特徴や、少女マンガの歴史が書かれています。

著者の萩尾望都さんは、「男性は少女マンガのコマ割りを理解しづらい」とおっしゃっています。この本を読めば、少女マンガについての知識や興味関心を得ることができます。

「少女マンガは女性が読むもの」　そういった偏見はもう終わりです。きっとあなたも少女マンガのとりこになるでしょう。少女マンガの神様がつづる少女マンガの魅力。ぜひ手に取って読んでみてください。

髙田　莉穂（人間文化学科１年）

## 真摯さとは何か

### 『もし高校野球の女子マネージャーが ドラッカーの「マネジメント」を読んだら』

**岩崎夏海 著（ダイヤモンド社）**

主人公の川島みなみは、病気で入院中の親友・宮田夕紀の代役として野球部のマネージャーになり「野球部を甲子園に連れていくこと」を目標に決めます。そして、ドラッカーの『マネジメント』という一冊の本に出会います。

みなみは『マネジメント』を読み、野球部にとって顧客とは誰を指すのかなどについてドラッカーに詳しい補欠部員の二階正義と話すことで解決していきます。また、マネジャー(マネージャー)として大切な根本的素質であるとされる「真摯さ」が、野球が大嫌いで親友を感動させるためだけにマネージャーをやっている自分にはないのではないかと葛藤したり、『マネジメント』には成果が重要と書いてあるが、結果と過程のどちらを重視するべきかを考えたりすることで主人公が成長していく様子が印象的です。

この本はタイトルの通り、もしもドラッカーの『マネジメント』を高校野球のマネージャーが読んでマネジメントしてみたら、という小説で『マネジメント』の引用が多数使われており、分かりやすい解釈になっているので「マネジメント」という言葉に興味を持った人は読んでみると良いのではないかと思います。

田坂 共平（情報工学科１年）

## 成功の裏で奮闘した海の手配師

### 『「水族館」革命—世界初！深海水族館のつくり方』
**石垣幸二 著（宝島社新書）**

深海生物と聞いて、皆さん何を思い浮かべるでしょうか。美しい、気持ちが悪いなど、人によって様々なイメージがありますが、深海生物には意外と知られていない魅力が多々あります。そんな深海生物の展示をすることで今となっては全国的に有名になった沼津港深海水族館の館長・石垣幸二さんが執筆することになったこの本では、沼津港深海水族館が設立するまでに至った道のりや様々な困難、水族館の裏側などを教えてくれます。

海の手配師として世界中の水族館の間で知れ渡っている石垣さんが、テレビで語らなかった意外な過去や、あのさかなクンとの交流などをこの本を読んでくれる読者だけに語ってくれました。テレビなど、石垣さんの出演された番組をよく見ている読者の方でも見たことのないような石垣さんの一面が知れると思います。

海の生き物が好きで、ただ夢中になって仕事を続けてきた石垣さんがこの本を通して読者に伝えたいこと、それは石垣さんと同じような思いで海を探求する人や、そうでない人にとっても大切な事なのです。あなたもこの本を読んで、それが何なのか知りたいと思いませんか？

仲谷 瑞起（海洋生物科学科１年）

## 経済初心者にもわかりやすい！

# 『入門日本経済論』

**釣 雅雄 著（新世社）**

僕はもともと経済学に興味があり、経済について色々知りたいと思っていたのですが、インターネットや、テレビを見ても難しい専門用語や、もともと経済について知っていることが少ないということもあって、聞いていてもあまり理解できませんでした。

そんな時、この本を見つけて、読んでみようと思いました。この本は図を用いた解説や、わかりやすい言葉で書かれているので、経済についてあまり知らない人、経済について全く知らない人でも、経済のことがわかるようになる本です。現在の日本経済のことだけでなく、戦前の経済のとこからバブル時代のことや、現在の経済のことを色々な角度から見て書かれているので、素晴らしい本です。

この本を読んで僕は、経済についての基礎知識がつき、今までは内容がわからないことが多かったマクロ経済学の授業も、よくわかるようになりました。

鍋谷 寿孝（経済学科１年）

## 『「こうあるべき」をやめなさい
## —人生が変わる９つの思考法』

**和田秀樹 著（大和書房）**

私たちは誰しも「こうあるべき」という固定観念をもっています。ですが、その固定観念が自分自身にとって必ずしも良いものというわけではありません。本書ではそういった固定観念を洗い出し、矛盾点を払拭します！

皆さんはニュースや新聞などのメディアで報道されていることが全て真実だと思いますか？もし、それが特定の誰かにとって都合の良い内容になっていたとしたらどう思いますか？もちろん、メディアが報道していること全てが嘘というわけではありませんが、それらの情報を全て鵜呑みにするのはいかがなものでしょうか？メディアの取り上げる視点次第で、何も考えずに見ているだけでは気付くことができない点が多くあります。

この本を読んで広い視野を持ち、自分の世界を広げてみませんか？

新田 耕大（情報工学科１年）

## 『おカネの教室
## —僕らがおかしなクラブで学んだ秘密』
### 高井浩章 著（インプレス）

この物語は、主人公の「サッチョウさん」、一緒におカネについて共に学ぶ仲間の「ビャッコさん」、2 人におカネについて考えさせる「カイシュウ先生」の 3 人を物語の中心として、あらゆる方面からお金について考え、各々の立場からの意見を出し、考えを深めていく物語です。おカネを手に入れる方法を「かせぐ」「もらう」「ぬすむ」「かりる」「ふやす」「？？？」に分類し、この職業はどれに分類されるかを考え、様々な職業や行動に対して各々の考え方で意見を交えていき、最終的に「？？？」には何が入るのかを当てるために頑張るというのが大まかなストーリーです。

この物語の良いところは、ただただおカネについて考えるのではなく、登場人物達と一緒に一から少しずつ学んでいけるので、理解がしやすく、物語自体に惹かれる部分が多く、全く苦も無く楽しく学ぶことができるところです。楽しくおカネを学べるので凄くおすすめです。

能登 俊作（経済学科 1 年）

## 『ビジネスで大事なことは
## マンチェスター・ユナイテッドが教えてくれる』

**広瀬一郎，山本真司 著（近代セールス社）**

この本は、世界トップクラスのサッカーチームを題材に、ビジネスで勝つための経営戦略の作り方を２人の著者の対談形式で書かれている。

私は、スポーツとビジネスの関係性にとても興味があった。マンチェスター・ユナイテッドは、2005 年に巨大な負債を抱え、グレーサーという人物に買収されてしまう。これにより、財務状況が悪化し、補強ができず、クラブは不振に陥ってしまう。しかし、回復を目指して様々なリスクを取り、世界に目を向け、新しいビジネスにチャレンジをした。それにより、世界一の資産価値を持つクラブとなった。著者らは、次世代の企業経営を担う若者たちに、「成功を収めるためには１つの分野のみならず、外の世界に目を向け、チャレンジをすることが大切だ」と伝えている。

私は、この本を読み、スポーツビジネスへの興味が強くなった。スポーツ好きだけでなく、ビジネスに興味がある人へ是非オススメしたい。

畠中 健人（経済学科１年）

## 経済と社会問題との関係

### 『99%のための経済学』
**佐野 誠 著（新評論）**

この本は、社会で起きている問題を経済学的な面から考えていく本です。経済のことを教養のレベルで知ることができると思い興味を持ちました。

この本の著者は、「共生経済社会」というものに興味を持っており、それに早く突入したいと考えています。「共生経済社会」は社会で起きている問題を解決することの役に立つと考えています。なぜなら、貧富の差をなくすための経済だからです。しかし、これを邪魔しているものが、現代固有の政治的景気循環である「新自由主義サイクル」というものです。これが引き起こす問題は、一握りの富裕層に所得が集中し、圧倒的多数の人々の暮らしを破壊していることです。そのことで、特に健康や教育の面での格差が広がります。なので、この問題を解決するためにも、著者は「新自由主義サイクル」を撃ち、「共生経済社会」へと進むことが必要である、と語っています。

この本を読んだ感想として、難しい表現も少なく読みやすいと思いました。社会問題と経済が関係しあっているということもわかりました。ぜひ一度読んでいただきたい一冊です。

宮座 雅治（経済学科１年）

## 真のトースターの価値

### 『ゼロからトースターを作ってみた結果』
**トーマス・トウェイツ 著，村井理子 訳（新潮社）**

普段の朝食の主食は何だろうか？店に売られているトースターについて深く考えたことがあるだろうか。トースター１つを作り上げるまでにかかった食費、履き潰した靴代などを合算すると沢山のコストが値札以上にかかっている。製造に関連するすべてのコストがはっきりすれば、トースターの値段はもう少しあがり、大量消費ということはできなくなるだろう。

今回のトースター製作では鉄道をトースター作りに必要な手段として世界各地を回った。トースターを安く大量生産する企業があるため、近年使い捨てのような感覚で人々はトースターを買ってしまう。大量消費の時代に苦労をして１つのトースターを作るために部品の材料を集めに自力で世界各地の鉱山を訪れた故に、出来たと思ったが満足のいく出来ではなく、振出しに戻ったかのような気分に。

ものづくりの面白さは、「極めていくところ」にあるのではないだろうか。大量消費の現代を生きる私たちの課題とは一体…。

魚崎 拓己（人間文化学科１年）

## 見えてくるものはそれだけ？

### 『すぐわかるキリスト教絵画の見かた』
**千足伸行［ほか］著（東京美術）**

みなさんは美術館や博物館によく足を運ぶ方ですか？インターネットや本、雑誌などで、美術作品を見たことはありますか？

2007 年に出版されベストセラーとなった『怖い絵』（中野京子著）は、「タイトルや題材は知らないけれど、誰もが知っている絵の、実は怖い物語」を解説した作品ですが、本書では、キリスト教絵画に込められた“怖い話”だけではなく、ストーリーやメッセージを解説しています。

一般に“名画”として知れ渡っている絵画について、図像のポイントやその絵の場面、作者や題材に関するポイント解説などが、見開き毎にコンパクトに記述されており、キリスト教絵画を学術的に読み解くための入門書と言えるでしょう。

大学生になった皆さんには、美術館や博物館でも、今までとは違う視点で展示品を楽しんで頂きたいと思います。その一助になり得る一冊です。

また、福山大学には「キャンパスメンバーズ」という制度があります。市内の美術館・博物館を学生証の提示でおトクに利用し、知的に文化・芸術に触れてみませんか。

**喜多村 侑佳（附属図書館）**

## 日本の古民家は古いだけじゃない

### 『生きられた家—経験と象徴』
**多木浩二 著（青土社）**

「人が立ち去ったばかりの家に入ると、エネルギーが頬をうつ。空洞化した部屋の壁や床や天井には無数の痕跡が見いだされる。その痕跡を眼にしたとき、われわれはすばやくこれを読みはじめているのである」（本文抜粋）。

古い民家には長年住んで人の生の営みを生々しい空気間で感じることができる。

この本では、家の中で生活した人それぞれが織りなした空間「生活術」を感じることができる「民家」の良さについて紹介している。現代建築家が目指す耐震・デザインを主体としたコンクリート、トタン、アルミサッシなどで造られた建築では、殆ど感じることができない感覚です。民家を解体し、古い柱を利用した喫茶店や食堂に入ると、何故かホッとする感じがするのも「過去の“証（あかし）”」がそこに存在するからです。

本書は写真集のテキストとして書かれたエッセイを纏めたもので、建築家として民家の意義を再認識できる本だと思います。

桑田 成年（附属図書館）

## 野菜のことを知りたいのならこれ

### 『データが語るおいしい野菜の健康力』

**及川紀久雄，丹羽真清，霜多増雄 著（丸善出版）**

この本は、ちゃんとしたデータから、どのような野菜がいいのか、おいしい野菜は健康的なのか、野菜は自分たちにどのような関係があり、どのような健康をもたらしてくれるのか、おいしい野菜を作るにはどのようなことをすればいいのかなど、さまざまな内容が書かれており、初心者や少し知識がある人などが読んでもとてもためになり、雑学としての知識が学べると思います。

野菜にはさまざまな成分があり、トマトと玉葱が同じ機能をしてくれることや、キャベツと白菜が似ている機能をしてくれるなど、このほかにも普通の人にはあまり知られていないことが、たくさんの野菜について書かれていて、どれがどの機能を果たしているかが写真つきでとてもわかりやすく、写真を見ているだけでもおもしろいと思います！

特に自分がお勧めしたいところは、イチゴとほうれん草が同じ機能をしていることが書かれているところです。この本を読むだけで野菜についてはわかると思うので是非読んでみてください！

瀬尾 飛翔（海洋生物科学科１年）

## 虫の分類学の進化

### 『虫の文化史』
**笹川満広 著（文一総合出版）**

この本では、「虫とは何か」ということ、つまり「虫の定義」についての考えが書いてあります。今では、虫とは昆虫のことを指しますが、それは生物の発生学が進歩して分類学が整理された結果なのです。

中国では、魚と鳥と獣以外のものを、その他の意味で虫として分類していたそうです。漢字で書く時に、虫偏がつくものは全て虫と分類されていたそうです。今の分類学からすればアバウトですが、何となく大らかで親しみやすい感じがします。フランスでは、昆虫書にも、トカゲやザリガニやミジンコを虫として扱っていました。これも、漢字で書くと虫偏がつきます。不思議なことに、洋の東西にかかわらず、感覚的な虫に対する概念は同じだったそうです。得体のハッキリしないものはみんな虫として扱われたのです。

今となっては、虫とは何かを、ハッキリと分けてありますが、昔の虫とはすごく分かりにくく、虫の定義すらわからなかったけれど、時がたてば虫の文化も変わりゆくので、色々な角度から眺めてゆくと面白いですね。

平野 琉希（経済学科１年）

## 『図書館戦争』
### 有川 浩 著（アスキー・メディアワークス）

メディア良化法の成立により、出版物の検閲が合法となった近未来の日本が舞台です。メディア良化隊員により、規制の対象となる本が押収されていくなか、図書館だけは図書館法「図書館の自由」という宣言により、合法的に検閲に対抗できる立場を保っています。

軍事力を持つメディア良化隊に対抗し本を守るため、図書館も独自の軍事力を組織。それが主人公の所属する「図書隊」です。

作者の有川浩は自衛隊を描いた小説でデビューしただけあり、日ごろ軍事ものを読まない読者でも分かりやすく、しかもリアルな戦闘描写が特徴です。

そして、この図書隊員たちの恋愛模様もこのシリーズが多くの読者に支持を得ている１番の要素でしょう。ＳＦ、アクションといった小説が好きな人はもちろん、ラブコメが好きな人にもぜひ読んでほしいシリーズです。

青沼 優佳（心理学科１年）

## アニメも原作も両方面白い！きっとあなたも「人間と狸と天狗の三つ巴」に夢中になる

### 『有頂天家族』

**森見登美彦 著（幻冬舎）**

これは人間と狸と天狗を中心に京都を舞台に繰り広げられる話で、主人公の矢三郎は下鴨総一郎という京都の狸界を束ねていた立派な狸の三男坊。総一郎は数年前の金曜倶楽部の忘年会にて、鍋の具として食われてしまい、この世に「さよなら」をした。「さよなら」をするにあたり、総一郎は偉大なるその血を律義に四つに分けた。長兄は責任感を、次兄は呑気な性格を、矢三郎は阿呆ぶりを、弟は純真さを受け継いだ。そんな性格も年齢もばらばらな兄弟は、父の死により今まで以上にばらばらに。それを一つに繋いでいるのは、海よりも深い母の愛と、偉大なる父との「さよなら」だった。

話が進むにつれ、父の死の真相が明らかにされて行くが、そこに辿り着くまでの下鴨家の絆がとてもいい。「父の死」という悲しい話なのに、それだけで終わらないのは、作者の「さよなら」という表現と、矢三郎の「面白おかしく生きる」という信条のおかげだと私は思う。

この作品はアニメ化もされているので、そちらもオススメです。アニメに感動したらぜひ原作も読んでみてください。

赤枝 沙紀（心理学科１年）

## 本を楽しむ方法の１つ

### 『八日目の蝉』
**角田光代 著（中央公論新社）**

ベビーベッドの中で泣いている赤ちゃんに手を伸ばす。笑う赤ん坊を見て「私がまもる」、そう誓った。

不倫相手の子供を自分の子供として育てていくことを決めた。もし逃げ延びたら自分は本当の母親になれるだろうか。逃亡生活の中で出会う人たちにかくまわれながら、そう信じひたすら逃げ続ける。

もし逃げ延びることができたとしたら、赤ん坊は自分のことを本当の母親だと思ったまま成長していくことだろう。しかし、誘拐された赤ん坊にとってはどうだろうか。本当の母親には育てられていないため、実の母親との思い出もなければ、母親だと思っていた女が、本当は誘拐犯だったと知ったとき、どんな気持ちになるだろうか。

『八日目の蝉』を読むときは、誘拐された子供、誘拐した主人公の気持ちを自分自身に置き換えて読み進めていくのが良いと思います。登場人物たちの心情を読み取るのが難しいと思う人でも、自分がその登場人物たちの立場だとしたらと考えると、感情移入ができると思います。

**板岡 真央（心理学科１年）**

## 現代に生きる若者に感じて欲しい命の重さ

### 『永遠の０』
**百田尚樹 著（講談社文庫）**

ストレス社会で生きる僕たちは命についてどう考えているか、とても生きづらい世の中で自分の生き方を曲げずに通せる人はどれだけいるのか、激動の時代を生きた先人に学ぶ命の物語。

第二次世界大戦、追い詰められた日本はついに正気の沙汰とは思えない作戦に出た。若き青年たちの思い、未来はどうなるのであろうか。

臆病者といわれた天才戦闘機乗りの主人公は、自分の生き方を貫こうとする。例え仲間に冷ややかな言葉を浴びせられても。

戦局は大きく悪化。主人公はかろうじて生き残っていたが、自分の教えた後輩パイロットが次々に散っていく。このまま生きていてもいいのかと自分に問う主人公。

ついに主人公にも特攻作戦の命令が下される。その時手にした最後の生き残るチャンスと次の世代の命のどちらが大切か悩む主人公。自分の死で次世代の日本に繋げた思いは無駄にしてはいけない。

映画『永遠の０』の原作小説で、映画にはない面白さと主人公の心の動きが読み込めます。ぜひ、読んでみてほしい一冊です。

**江草 海暁（経済学科１年）**

## 恋とか愛とか人生とかを考えさせられる群像小説

### 『ふがいない僕は空を見た』
**窪 美澄 著（新潮文庫）**

この小説にある出来事のどれをも私は経験したことがない。そのはずなのに、なぜこんなにも登場人物の一人一人に感情移入してしまうのだろうか。 この本を買ってしばらく経つが、ふと思い出した時にまた読みたくなる、そんな中毒性のある小説だ。

衝撃的かつ生々しい、誰にも言えない不倫関係、ドロドロとした嫁姑関係、崩壊寸前な夫婦のどうすることもできない冷え切った愛、何も知らない純粋な高校生の単純な恋、未来に絶望を抱き毎日を過ごす男子高校生、厄介な性癖を抱えて″いいやつ″のフリをして生きる大人、女手一つで息子を育ててきた母親…。 幸せも不幸せも、痛みも喜びも悲しみも、それらの感情のどれもがたくさん散りばめられている。 また、この小説は、魅力的で繊細な言葉たちによって物語が進んでいく。今、誰とどこにいるのか、どんな風景が見えているのか、どんな心情で、どんな表情をしているのか…。

まるで映画を観ているかのように、文章を読むだけで見えてくる。 物語の面白さはもちろん、作者の表現の豊かさにも注目して読んでもらいたい作品だ。

**桒田 優月（心理学科１年）**

## 生きることの尊さ、
## 生きている本当の意味を確認する参考書

### 『君の膵臓をたべたい』
**住野よる 著（双葉社）**

「君の膵臓を食べたい」といわれると一見怖いように聞こえるフレーズかもしれません。しかしヒロインの咲良は膵臓の病気によって余命宣告されており、亡くなるまでにしたいことがたくさんありました。彼女は病気のことは家族以外には言わないと決めていました。ある時、病気発覚後からの出来事をしたためていた≪共病文庫≫を主人公に見られてしまい、その出会いからこの物語は進んでいきます。

主人公と咲良は正反対の性格でした。しかし、彼女とともに行動する中で、主人公は人として性格から内面までを変えることができました。主人公にとって彼女は元気なクラスメイトから自分を変えてくれた大事な人へと変化をし、お互いが大切な存在へとなっていきます。彼女は途中途中で「私死ぬよ」と口走ります。本を読み進めることにより言葉の重みを感じるようになります。

最後には想像していなかったことが起きてしまいます。そこで主人公は命の尊さを知ることになります。生きることの本当の意味について書かれた素晴らしい小説です。是非読んでみてください。

**河野 隼也（心理学科１年）**

## 隠された陰に潜むモノ

### 『精霊の守り人』
**上橋菜穂子 著（新潮文庫）**

すべては老練な女用心棒バルサが、川に落ちた新ヨゴ皇国の第二皇子チャグムを助けたことから始まります。その腕を見込まれ、彼の母二ノ宮から用心棒を依頼されます。伝承によれば、帝が誕生した所以である卵の化け物を宿した幼い皇子は、自らの父にその命を狙われます。ところが、先住民たちの言い伝えによると卵は守護すべきものであり、異界の化け物こそが倒すべきものである――。捻じ曲げられた伝承、襲いくる刺客、不可視の怪物、そのすべてがただ一人にのしかかります。バルサと共に行動する仲間たちはすべてが終わった後、更なる選択を迫られます。

この本は先住民と、後からやってきた民族に残る伝承が大きな鍵を握る作品です。勝者が残すものは必ずしも輝かしいものだけではない、それはどの物語の中にもあり得る話です。しかし敗者となった人間が残す話がすべて正しいとは限らない。どれを信じ、何を疑うか思考し行動する。まるで彼らは生きているかのような感覚に陥ります。ぜひ、この感動を実感してください。最後に、あの選択、皆さんならどのような未来をつかみますか？

清水 楽叶（薬学科１年）

## 異世界への扉

# 『二分間の冒険』

**岡田 淳 作，太田大八 絵（偕成社）**

この本は１匹の黒ネコと１人の少年が何の変哲もない日常で出会うことから始まります。黒ネコは少年を竜と人が暮らすある異世界へ飛ばしてしまいます。そこでは竜との戦いが幾度となく儀式のように行われており、たおさなければ寿命を吸い取られてしまうのです。

そんな世界の冒険の途中で、なぜか同じクラスの人間と出会うことになります。「竜には勝てない」、そんな悲観的なことを口にするみんなでしたが、主人公の少年は何度もみんなを勇気づけます。そして団結することができたみんなは、道を阻む竜と館の老人と呼ばれる者たちと戦うことになります。また、少年は異世界を出るために黒ネコを探さなくてはいけませんでした。物語の真髄を解いた時、竜を倒し、黒ネコもまた見つけることが出来たのです。

この物語では日常から異世界へと飛び込んでいくワクワク感と、冒険という幼い頃を思い出すような、なんとも言えない気持ちになることができます。

ぜひ一度は読んでみて欲しい１冊です。

**達川 哲志（海洋生物科学科１年）**

## あなたの宝物もきっと拾ってもらえる。

### 『深海カフェ海底二万哩』
**蒼月海里 著（角川文庫）**

私は海の生き物が好きで、この本のタイトルと表紙をみた瞬間に「読もう。」と決めた。読んでみて、忙しい、癒されたいときにおすすめだと感じたので、紹介する。

主人公の倫太郎は、心の海に宝物を落としてしまった人のみが入れるカフェ・海底二万哩を偶然見つける。店主の深海(ふかみ)としゃべるメンダコ執事のセバスチャンと共に、お客さんの心の海に落ちた宝物を探しに行くことに。心の海という不思議な空間のなかで、様々な深海生物たちに出会う。何度か繰り返すうちに、倫太郎自身にも落としてしまった宝物があると気付いて…？なぜ深海は 7 年前にいなくなった大空兄ちゃんにそっくりなのか。彼の正体はいったい何者なのか。

自分の好きなものを「好きだ」と言っていいんだ、つらいときは少し休んでもいいんだ、そう思わせてくれる物語だ。自信が欲しいとき、リラックスしたいとき、この本を読んでみてはどうだろうか。

谷口 佳音（心理学科 1 年）

## 緊張と臨場

# 『王とサーカス』

**米澤穂信 著（東京創元社）**

「記者」という仕事について、あなたはどんなイメージをするだろうか。記者が事件に関わる時にどのような立場であるべきなのだろうか。これは記者という立場である主人公の記者人生、さらに運命までも左右した作品である。

ネパールの王宮にて、国王殺害事件が発生した。偶然その国にいた主人公は、その事件の取材にあたる。現地の人などの提供する情報や主人公の冷静な観点から、事件の全容に迫っていくが、同時に、国の暴動・陰謀論、一人の変死体などが問題の謎をさらに深めていく。取材の時間も限られた中、様々な考えを巡らせ、推理していく話である。

この話は、実際に起きた王宮事件を取り込んだフィクションである。だから、壮大な世界観であるが、頭にその場の情景が浮かびやすい。加えて、作者の丁寧な情景描写や心理描写が、その場の臨場感を際立たせ、読む私たちも緊張感を味わうことができる。是非考えながら読んでほしい。

松島 令磨（人間文化学科１年）

## 野球小説・児童書における革命本

### 『バッテリー』
### あさのあつこ 著（角川文庫）

そうだ、本気になれよ。本気で向かってこい。子どもだとか小学生だとか中学生だとか関係ないこと全部捨てて、俺の球だけを見ろよ。―――

主人公原田巧は、豪速球を投げる天才ピッチャーで、上記の言葉のように、かなりの自信を持ち、それゆえ協調性を持たず、人を冷酷に切り捨てることもあり、人との衝突が多い。そんな巧が、キャッチャーで相棒になる永倉豪を中心に、東谷啓太・沢口文人ら同級生、海音寺一希・野々村旭良の新旧キャプテンなど自分と違うタイプの人間と、新田中野球部内外で過ごす。巧のライバルとして、全国ベスト４の強豪校の４番・５番で天才バッターの門脇秀吾、曲者・瑞垣俊二が立ちはだかる。豪を中心とした仲間達との苦楽、強敵の出現により、巧は少しずつだが自分の思いや周りの考えが分かるようになり、変化があった。そして迎えるライバルとの再戦、その結果は…。

中学生を主とした野球作品でありながら、異彩を放つ主人公によって生み出される、 新しい野球小説がここにある。

安井 雅浩（心理学科１年）

## 海面に向かう馬のように自由に生きよう

### 『カラフル』
**森 絵都 著（文春文庫）**

この物語は、主人公の目の前に天使が現れるところから始まります。そう、主人公は物語の最初にして、既に死んでしまっていたのです。

しかし、主人公は前世でひどいあやまちを犯しており、そのあやまちを思い出し更正するために小林真の体に魂を宿らせ、ホームステイとしてもう一度現世で生活をするという挑戦を与えられます。そして主人公は、家族や友達がもたらす影響によって自分が前世で犯したあやまちがどのようなものであったのかに気付いていきます。ですが、ホームステイ先の家族や、小林真という人物は多くの問題を抱えており、主人公は様々な困難に直面していきます。父、母、兄、友達、それぞれがどのような問題を抱えているのか、また、誰も知ることの無かった真実とは何であるのか…。

人生は一度きりであり、一度死んでしまえば決して生き返ることは無く、だからこそこの本は私に生きることの大切さを教えてくれました。生きることは決して楽なことではありませんが、それでも頑張って生きていこうと思えるような作品です。

宇山 真依子（心理学科１年）

## 愛しぬくということ

### 『大恋愛―僕を忘れる君と』
**大石 静 著（扶桑社）**

この本は、若年性アルツハイマー病と闘う人のストーリーです。たとえ、好きな人が若年性アルツハイマー病にかかったとしても、本当の愛があれば、その一人の人を愛し続けることが出来ると教えてくれる本です。

わたしも、最初はただのラブストーリーに過ぎないと思っていました。しかし、実際本を手にとって読んでみると、様々な人が世の中にはいるということが、改めてわかりました。元気な人、スポーツ万能な人、絵を描く人、小説を書く人、そして、まだまだ生きていたいのに、病気を患い亡くなってしまう人。この小説はラブストーリーというロマンチックな場面も、もちろん多々ありますが、なんといっても、命の大切さについていちばん教えてくれる小説だとわたしは思いました。

世の中には生きたくても生きられない人がいるのに、自殺をする人もいます。もちろん自殺してしまう方には理由があるのだと思うのですが、やはり自分から命を絶つことだけはしてはいけないと改めて思わせてくれる本です。皆さんもぜひこの本を読んでみてはいかがですか。

小川 哲平（税務会計学科１年）

## 親友と愛の重さの違い

### 『こころ』
**夏目漱石 著（新潮社）**

この小説はとても長いのであらすじを簡単に説明したいと思います。先生と親友のKが下宿先の御嬢さんに恋をし、そのことを最初にKが先生に打ち明けました。しかしそのことを知り焦った先生が、Kに相談されたにもかかわらずKに黙って御嬢さんと結婚してしまいます。それを知ったあとにKは下宿先で自殺してしまいます。そして自分が親友だったKを追い込んだと罪悪感に襲われ、先生ものちに自殺してしまいます。

私がこの本に興味を持ったのは、「昔の小説なのに今読んでもとても面白いよ」と高校の先生に勧められたのがきっかけでした。最初は半信半疑で読んでいましたが、とても面白く現代でもこれほど面白い小説は少ないと思います。この本の一番の醍醐味は、先生とKの関係が恋愛関係でどんどん変化していくところです。そして何よりもこの本は読む人によってなぜKが自殺したのかの見解が分かれます。それがとても面白い部分だと私は感じます。この本をみんなで読んで、それについて話し合ってみるのも楽しいと思います。

こういった理由から私は『こころ』という本を皆さんに紹介します。

鈴木 秀治（経済学科１年）

## あなたにカフカ、処方します。

### 『絶望名人カフカの人生論』
**フランツ・カフカ 著，頭木弘樹 訳（新潮文庫）**

あなたが、「いちばんうまくできること」は何ですか。あなたはどのように答えるでしょうか？カフカはこう言います。「いちばんうまくできるのは、倒れたままでいることです」

あの『変身』を世に送り出した、文豪フランツ・カフカ。彼の人生は、苦悩と絶望に満ちたものでした。手紙やノートに書かれた言葉には、仕事や人生、父のこと、結婚のこと。どれもこれもネガティブな言葉にあふれています。好きなはずの文学や、婚約者への手紙でさえ、自己嫌悪が書かれています。そんな彼の言葉が解説とともに収められています。

大半の名言集は、前向きな言葉が多いでしょう。カフカは違います。「ぼくは人生に必要な能力を、なにひとつ備えておらず、ただ人間的な弱みしか持っていない。」このような言葉が載っています。元気の出ないとき。「やればできるから」「がんばれ」という言葉につらくなってしまったとき。明るい言葉が嫌になったとき。ぜひ、この本を読んでみてください。きっと心が落ち着くはずです。

ネガティブな言葉がちょっと良い。そんなカフカの言葉に触れてみませんか。

**戸田　一樹（人間文化学科１年）**

## 『東京すみっこごはん』

**成田名璃子 著（光文社）**

主人公はクラスからいじめられ、無視され自分の存在に疑問を持つようになる。おじいちゃんや幼なじみに心配されるが、そのことを話せないでいる。そんな時に、共同台所すみっこごはんと出会う。

人と人との温かい交流から、主人公は前向きな気持ちになっていく。食卓を囲い、一緒にごはんを食べたり、一緒にごはんを作ったりして交流をすることが、主人公の気持ちを変えた。

この話は、食卓で一緒にごはんをとり会話を弾ませ楽しい時間を過ごす。こんな時間が人には必要なのだと思う。一人暮らしや下宿生活をしていると、そんな日々の当たり前だった時間が恋しくなってくる。

心やお腹が寂しくなった時には、この本を読んでみてください。心もお腹も、とっても温まります。面白いので是非読んでみてください。

中村 直人（経済学科１年）

## 知ってほしい。動物との約束。

### 『犬と私の 10 の約束』
**サイトウアカリ 著（毎日新聞社）**

あなたは動物が好きですか？共に暮らしたことはありますか？可愛いと思うだけでは、動物を育ててはいけません。動物と共に暮らすのであれば、動物の気持ちを大切にする必要があります。この本は、犬と共に暮らし始めてから共に成長し、動物の温かさに気づく物語です。

犬が飼いたいと言った主人公に対して、母は犬の立場から飼い主にして欲しいことをまとめた 10 の約束を作りました。しかし、主人公が成長していくにつれ、約束を忘れ、犬をキズ付けてしまう日がありました。しかし犬は、なにも文句を言いません。母は犬と私の 10 の約束として、守るべきことを教えましたが、主人公が成長し、友達や恋愛など新しいワクワクすることに興味を持ち、犬といる時間や、大切な約束を忘れてしまったのです。そういった困難が数々あったが 10 の約束の中の「私が死ぬとき、お願いです、そばにいてください。どうか覚えていてください、私がずっとあなたを愛していたことを」を思い出した主人公は、犬に大切なことを気付かされるのです。

この本を 1 人でも多くの人が読み、動物のことをもっと好きになってもらいたいです。そして、この 10 の約束を覚えていて欲しいです。

西添 亜美香（心理学科 1 年）

## 波乱万丈なアスリート人生を駆け抜けた
## 伊良部秀輝投手の素顔と残した功績がわかる本

### 『伊良部秀輝—野球を愛しすぎた男の真実』
**団 野村 著（PHP 新書）**

彼の投球を見たことのある野球ファンにとって、伊良部秀輝投手の印象は今でも強烈です。常に速球で真っ向勝負を挑む投手でした。千葉ロッテマリーンズ、ニューヨークヤンキース、阪神タイガースで活躍しました。大リーグへの挑戦においては野茂英雄投手と並んで、その後の日本選手の挑戦に道筋をつけることになる貢献をしました。

伊良部投手は野茂投手が採用した任意引退という方法を使わずに大リーグ移籍に挑戦する中、周囲の批判を浴びてしまいました。彼のケースがきっかけとなりポスティングというシステムができました。この制度のおかげでイチロー選手をはじめ多数の日本選手がＦＡ権取得前に大リーグ移籍に挑戦することができるようになりました。筆者が描く伊良部投手の素顔は報道であったようなネガティブなイメージとは大いに異なります。

大リーグに挑む日本選手は野茂投手だけでなく今は亡き伊良部投手の勇気と苦労にも思いを馳せて欲しいと感じます。

早川 達二（経済学科）

## やる気を出すためにやる気を出して読む本

### 『やる気はどこから来るのか
### —意欲の心理学理論』

**奈須正裕 著（北大路書房）**

この本は、立教大学文学部教育学科の教授を勤めておられる奈須正裕先生が書かれた『やる気はどこから来るのか』という題名の心理学の本です。

この本は誰もが一度は経験したことがあるであろう「やる気が出ない」「気持ちはあるけど行動に出せない」といった状況の理由を、心理学的目線から解明しています。「やらなきゃいけないのにやる気が出ない」ではなぜやる気が出ないのか、それにはそれなりの理由、心のメカニズムがあります。ならばそれを解明すれば、無理なく上手にやる気を出せるようになるかもしれない、そういった事が書かれた本なのです。

やる気を出せない自分が悪いと、責めるのはやめましょう。やる気の出せない理由を理解し、根本を解明できれば、今後あなたの人生はより良いものになるかもしれませんよ！！やらなければならないことはわかっているのに、行動に出せない、こんな無限ループから脱出しましょう。読んで損しない、必ず役に立つ知識が身につく本です。ぜひ一発やる気を出して読んでみてください。

松岡 邦丸（経済学科１年）

## 自分自身に語りかけ、明日に向かって生きる

### 『置かれた場所で咲きなさい』
**渡辺和子 著（幻冬舎）**

私が紹介するのは、ノートルダム清心女子大学三代目学長の渡辺和子さんの著書『置かれた場所で咲きなさい』という本です。渡辺さんが清心大学に派遣され、挨拶をしても返してくれない、苦労しているのに他の人がわかってくれない、ねぎらってくれないという「くれない族」になってしまったことと、イメージとリアルのギャップの違いから自信の喪失をしてしまいます。

自信を喪失した渡辺さんに、一人の宣教師が短い英語の詩をくださり、その最初の文が「置かれた場所で咲きなさい」という文です。そして「置かれた場所で咲きなさい」という言葉で始まるこの詩をキッカケに、渡辺さんは自分から挨拶し、ほほえみかけ、お礼を言う人になり、その変化は教職員や学生へ波及していきました。

このことから知ったことは、何事にもイメージとリアルのギャップがあることと、その状況下でも考え方や行動を変えることで自分や周囲の人を変えることが出来ることです。

今回紹介したのは、ほんの一部です。他にもこれからの生活に活かせる考え方、言葉が載っているので読んでみてください。

宮﨑 開都（心理学科１年）

## 目の前にあるものは事実ですか。

### 『Le Petit Prince　星の王子さま』
**サン=テグジュペリ 作，内藤 濯 訳（岩波書店）**

素直に物事を見るということは、どういうことなのか。見たままに判断するということなのか。それとも、自分の都合で解釈するということなのか。いや、どちらも違う。目に見えるもので、全ては判断できない。本当に大切なものは、目に見えない。目に見えないからこそ、大切なのである。

王子さまは、自分の育てたバラに不満を覚えて、自分の星から出て行き、旅をする。そこで、変な大人とばかり出会い、地理学者に地球をすすめられて、地球にやって来て、キツネと出会う。王子さまは、キツネと遊びたいと思っているが、キツネは「仲良くならないと遊ばない」と言って、本当の「仲良くなる」という意味を教える。そこで、王子さまは、自分の育てたバラがどれほど大切なものかということに気づく。

事実をありのままに見ること。それは、目で見ることではない。ハートで見ることである。本当に大切なものは、決して目には見えない。目には見えない何かが、大切なものを生み出すのである。

森田 美有（心理学科１年）

## 幸せ

### 『そして、バトンは渡された』
**瀬尾まいこ 著（文藝春秋）**

読みながら幸せな気分になる、読んだ後幸せな気持ちで満たされる、そういう小説を読んだ経験はたくさんあります。でも、読んだ後、日が経っても、その幸せがずっと続いていて、思わず笑顔になってしまうような経験はそれほど多くはありません。

今回紹介させていただく『そして、バトンは渡された』を読んでから、私はずっと穏やかで温かく、幸せな気持ちでいることができています。時には辛く、沈んでしまうこともありますが、ふと、この家族のことを思い出して、そして自分が大切に思う人のことを思い浮かべて、笑顔になれるのです。

誰かのことも自分のことも大切にしたくなるし、今自分がこうやって人とのつながりの中で生きているのが本当に幸せなのだと気づくことのできる作品です。すべての人におすすめします。

山本 真史（スマートシステム学科１年）

# 推薦図書リスト

『99%のための経済学　理論編』佐野誠（新評論，2013 年）

『生きられた家：経験と象徴』多木浩二（青土社，2019 年）

『犬と私の 10 の約束 』ｻｲﾄｳｱｶﾘ（毎日新聞出版，2008 年）

『伊良部秀輝：野球を愛しすぎた男の真実』団野村（PHP 研究所，2013 年）

『有頂天家族』森見登美彦（幻冬舎，2007 年）

『永遠の 0』百田尚樹（講談社，2009 年）

『王とｻｰｶｽ』米澤穂信（東京創元社，2015 年）

『ｵｰﾙ 1 の落ちこぼれ､教師になる』宮本延春（角川書店，2009 年）

『おｶﾈの教室：僕らがおかしなｸﾗﾌﾞで学んだ秘密』高井浩章（ｲﾝﾌﾟﾚｽ，2018 年）

『置かれた場所で咲きなさい』渡辺和子（幻冬舎，2012 年）

『神様のｶﾙﾃ』夏川草介（小学館，2009 年）

『神様のﾒﾓ帳』杉井光（ﾒﾃﾞｨｱﾜｰｸｽ，2007 年）

『ｶﾗﾌﾙ』森絵都（文藝春秋，2007 年）

『奇跡への扉』木村優貴（文芸社，2010 年）

『君の膵臓をたべたい』住野よる（双葉社，2015 年）

『「こうあるべき」をやめなさい：「いまある悩みがさっと消える」9 つの思考ﾊﾟﾀｰﾝ』
　和田秀樹（大和書房，2018 年）

『こころ』夏目漱石（新潮社，1987 年）

『ｺﾝﾋﾞﾆ人間』村田沙耶香（文藝春秋，2016 年）

『深海ｶﾌｪ海底二万哩』蒼月海里（KADOKAWA，2016 年）

『「水族館」革命：世界初！深海水族館のつくり方』石垣幸二（宝島社，2014 年）

『すぐわかるｷﾘｽﾄ教絵画の見かた 改訂版』千足伸行[ほか]（東京美術，2019 年）

『ｽﾗﾑﾀﾞﾝｸ勝利学』辻秀一（集英社ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ，2000 年）

『精霊の守り人』上橋菜穂子（新潮社，2007 年）

『絶望名人ｶﾌｶの人生論』ﾌﾗﾝﾂ･ｶﾌｶ（新潮社，2014 年）
『ｾﾞﾛからﾄｰｽﾀｰを作ってみた結果』ﾄｰﾏｽ･ﾄｳｪｲﾂ；村井理子訳
（新潮社，2015 年）
『そして､ﾊﾞﾄﾝは渡された』瀬尾まいこ（文藝春秋，2018 年）
『大学 4 年間の経済学が 10 時間でざっと学べる』
井堀利宏（KADOKAWA，2015 年）
『大恋愛：僕を忘れる君と』大石静；高橋和昭（扶桑社，2018 年）上･下巻
『ﾁｰｽﾞはどこへ消えた?』ｽﾍﾟﾝｻｰ･ｼﾞｮﾝｿﾝ；門田美鈴訳（扶桑社，2000 年）
『ﾃﾞｰﾀが語るおいしい野菜の健康力』
及川紀久雄，丹羽真清，霜多増雄（丸善出版，2012 年）
『東京すみっこごはん』成田名璃子（光文社，2015 年）
『図書館戦争』有川浩（ｱｽｷｰ・ﾒﾃﾞｨｱﾜｰｸｽ，KADOKAWA（発売），2006 年）
『何者』朝井ﾘｮｳ（新潮社，2012 年）
『悩む力』姜尚中（集英社，2008 年）
『二分間の冒険』岡田淳作；太田大八絵（偕成社，1985 年）
『入門日本経済論』釣雅雄（新世社，2014 年）
『ﾊﾞｯﾃﾘｰ』あさのあつこ（角川書店，2003 年）
『判断と決断：不完全な僕らがﾘｰﾀﾞｰであるために』
中竹竜二（東洋経済新報社，2011 年）
『ﾋﾞｼﾞﾈｽで大事なことはﾏﾝﾁｪｽﾀｰ･ﾕﾅｲﾃｯﾄﾞが教えてくれる：勝つための経営戦略
のつくり方』広瀬一郎，山本真司（近代ｾｰﾙｽ社，2013 年）
『広島はすごい』安西巧（新潮社，2016 年）
『ふがいない僕は空を見た』窪美澄（新潮社，2012 年）
『ﾌﾗﾝｽ人は 10 着しか服を持たない：ﾊﾟﾘで学んだ“暮らしの質”を高める秘訣』
ｼﾞｪﾆﾌｧｰ･L.ｽｺｯﾄ；神崎朗子訳（大和書房，2014 年）
『星の王子さま』ｱﾝﾄｱｰﾇ･ﾄﾞ･ｻﾝ･ﾃｸｼﾞｭﾍﾟﾘ；内藤濯訳（岩波書店，1980 年）

『ぼちぼちいこか』ﾏｲｸ･ｾｲﾗｰ作；ﾛﾊﾞｰﾄ･ｸﾞﾛｽﾏﾝ絵；いまえよしとも訳
（偕成社，1980 年）
『虫の文化史』笹川満広（文一総合出版，1979 年）
『もし高校野球の女子ﾏﾈｰｼﾞｬｰがﾄﾞﾗｯｶｰの「ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ」を読んだら』
岩崎夏海（ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞ社，2009 年）
『やる気はどこから来るのか：意欲の心理学理論』
奈須正裕（北大路書房，2002 年）
『八日目の蝉』角田光代（中央公論新社，2011 年）
『流星ﾜｺﾞﾝ』重松清（講談社，2005 年）
『私の少女ﾏﾝｶﾞ講義』萩尾望都（新潮社，2018 年）

新入生にすすめる 50 冊の本 2020
2020 年 4 月 1 日発行

編集・発行
福山大学図書館運営委員会図書館企画部会
〒729-0292
広島県福山市学園町 1 番地三蔵
福山大学附属図書館